

「エレベーターという文化」

(4) エレベーターと関東大震災後の文学

細馬宏通*

【失われた明治】

関東大震災の後、大正末期から昭和にかけては、エレベーターの発展期であるとともに、東京の風景が劇的に変化していった時期でもある。明治から大正にかけて、すでに街の景観は著しく変化していたが、その変化を震災は決定的なものにした。

明治・大正の東京を知る人々は、失われたできごとを書きとどめようとした。書きとどめることは、そのできごとが失われたことを確認する作業でもある。

大正十二年、田山花袋は震災にまつわる聞き書きを集め出した。それは翌年4月に「東京震災記」となった。

私は不思議な気がした。その自分の東京の面影はすっかり変って、震災前にもその髣髴を見ることは出来なくなってしまっていたけれども—それでも仔細に見れば注してさがせば、本町通りあたりや、爺橋、思案橋あたりや、その他、大通りにも二、三残っていたところがないではなかったのであったけれども、そういったものは、今はすっかり焼けて亡くなってしまったのであった。

しかし、かつて、「蒲団」の残り香に泣く男の見苦しさを見苦しきとして、自覚的に露呈させたこの作家は、震災の悲惨さをただ無自覚に悲惨に見せているわけではない。彼は赤く焦げた土の中を、灰燼の凄じく黄ろく舞う中を、自動車や車や罹災民の夥しく通る中を歩きながら、あえて強い調子で書く。

「それは人間は大切だ。それは言うも待たないことである。しかし、自然という物の大きな眼から見れば、人間も亦一つの生きたものである。(中略)

この震災も決して無意味に行なわれたのではないということが出来る。矢張、これも自然のリズムであらねばならぬ」

【エレベーターで屋上へ】

東京日日新聞で「大東京繁昌記」の連載が始まったのは、昭和2年春、震災から3年半の後のことだ。島崎藤村、永井荷風、岸田劉生、小山内薫など、そうそうたる執筆陣による、今昔の東京を綴ったリレー連載だった。

田山花袋も執筆者の一人だった。彼が担当した「日本橋附近」という文章は、いわば「東京震災記」の後日譚にあたる。彼はその文章の中で震災後の下町を歩き、わずかに残った明治、失われた明治を綴り、最後に百貨店にたどりつく。

三越の新館を見に出かけた。それは静かな明るい初夏の日の午前だった。私は多くの人達のやうにエレベーターで七階まで行って、そこから屋上庭園へのぼって行った。

光線のキラキラする中につつじが鮮やかに咲いて、かたつむりの形をした噴水器から細い水が静かにほとぼしるやうに両方に出てゐた。草花が赤く黄くまたむらさきにあたり綴られてゐた。

(田山花袋「日本橋附近」昭和2年)

* (Hiromichi Hosoma) 滋賀県立大学 人間文化学部講師

三越の屋上には、池があり、植樹がほどこされていた。三越だけでなく、当時、松屋、松坂屋などの百貨店が屋上に庭園や遊覧所、動物園などを備えていた。エレベーターは、明るい、眺望の開けた屋上で憩いを得るための交通手段でもあった。

一見するとこの一節は、新しい百貨店文化の美しさを言祝いでいるようでもある。しかしよく読むと、そこにはより微妙な陰影が見える。

「多くの人達のやうに」という花袋のことは、明治に生きた彼が、昭和の人々のやり方にならうときの、微かな躊躇が感じられる。

「エレベーターで行って」彼は自ら足を動かし一歩一歩屋上に近づくのではなく、上へと持ち上げられる。このことで、百貨店について語るとき誰もが口にするはずの賑やかな店内の光景が文章から省かれる。下町をたどり、失われた明治と震災の痕をたどった後に昭和の百貨店の喧噪を綴るのは、おそらくそぐわなかった。エレベーターというおよそ反明治的な文明の利器が、その喧噪をさりげなくやり過ぎさせ、彼を七階にたどりつかせる。

そこからは階段だ。今度は自らの足で屋上に向かう。「屋上に行った」でも「屋上にのぼった」でもなく「屋上にのぼって行った」と彼は書く。エレベーターのときは逆に、ここでは階段をのぼる時間がゆっくりと見つめられている。

エレベーターから階段へ、速度の異なる二つの分断された時間を経る。そのようにしてようやく、彼はこの時代を、そしてこの時代に至るまでにさまざまなものごとを失った自分を、そのような分断を強いた自然のリズムを、受け容れようとする。花袋は次のように続ける。

(かういふところも好いな) わたしの胸には
またしても私たちの若い時のことが繰返されて
来るのだつた。下をのぞくと、鉄筋を組立てて
ある大きな家屋だの、半すでに出来上つた建物
だの、震災の時のままのバラックの連つてある
のを目にした。私は昔のことを考へたり、将来
のことを考へたりして感慨無量だつた。ちやん
とわかつてゐて、それでまた何うなつて行くか
わからないやうな人生の姿だつた。(長く生き

るといふことは面白い。生きてゐればこそかう
したいろいろな変遷もみられるのだ……) 私
はあたりを見廻した。

(同上)

【速度は人を翻弄する】

明治・大正を生きた花袋は、時代を分断した震災と、それを貫く時間軸のありようを書いた。

一方、震災の前後に文壇にデビューした若い作家たちはどうだったか。彼らもまた、震災後に現れたビルディングの街並みや、百貨店文化の到来を単純に受容しているわけではなかった。金融恐慌の裏返しのように発展する街は、プロレタリア文学に和する作家にも抗う作家にも、屈折や反発を強いた。

花袋が「日本橋附近」を書いた昭和2年の文芸春秋12月号に、「東京アレグロ」というエッセイが載っている。横光利一や片岡鐵兵、菅忠男など、前回取り上げた新進作家たちが松坂屋、松屋、三越、丸の内ビルといった東京の新名所を車であわただしく巡り、その印象を文章によりスケッチする、という、時代の速さに追い立てられるような、気ぜわしい試みだつた。

この中で、横光利一は三越を次のように評している。

「見給へ、二匹の獅子が門前に立つてゐる。
反抗なんか、病氣の一種さ、と澄し込んでいる
面構へ、先づ満點。小鳥あり花あり、有る物より
無き物を捜すべしと云ふ懸賞でも出さうな所。」

「感想を赦さぬ所、もし感想が浮かんだら、
自分の周囲に拘模が何人あるかを考へると云う
ことは、一體自分が馬鹿なのだらうかどうだら
うかと考へさせられる程度のもの。」

(横光利一他「東京アレグロ」)

「反抗なんか一種の病氣さ」ということばに表われているのは、反抗の文学に対する揶揄だけではない。反抗を病氣と片づけてしまう百貨店の力、感想を赦さぬその物量の力もまた、そこには表れている。と同時に、そうした力に息苦しさを感じながら、自らの足運びの速さによってますますその力をはかり損ねている彼自身の姿もまた読みとれる。

時代は速さをもたらしたが、それは人の意図通りに進む速さではなかった。横光は、しばしば速度に翻弄される人間について書いた。花袋が三越の屋上で街を眺めていたのと同じ頃、横光が「七階の運動」の冒頭で「今日は昨日のつづきである。エレベーターは吐瀉を続けた。」と、エレベーターをあたかも紙幣行進曲を奏でる駆動力として表わしたことは、前回書いた。

速度感あふれる文章を綴っていた横光は、その一方で、その速さゆえに疲弊し、閉塞していく時代を予感していた。その時代の中でさらにことばを発しようとするなら、おそらくこれまでとは異なることばが必要になるはずだった。

【エレベーターで上海へ】

彼は三越について、「東京アレグロ」の中でふいにこんなことを書く。

エレベーターは船室のやうで上海あたりまで昇りさうな所。

気の利いた喩えめかしているが、唐突な一文だ。なぜエレベーターが船室なのか。なぜ東京をスケッチするのに、「上海」なのか。

じつはこの文章が世に出た翌年の4月、横光はじっさいに上海に行く。そのきっかけは、自殺した芥川龍之介から、作家として上海を見てくるよう勧められていたことにある、と言われている。

芥川が上海行きを勧めた詳しい意図は明らかではない。が、「上海」という地名は、時代の、そして横光自身の閉塞感を見極めるキーワードのように横光の頭の中に響いていたことだろう。おそらく彼は何度も、上海へ渡航する自分を夢想していた。その思いが、エレベーターという、出発地からも目的地からも隔てられた空間と時間を借りて、未来の自身への挨拶のように、漏れている。

上海行きの後、彼は初の長編「上海」の連載を開始する。それはできごとに次々とまなざしを移していく従来のスタイルで始まった。しかし、そのまなざしは以前とは異なっていた。

満潮になると河は膨れて逆流した。火を消し

て蟻集しているモーターボートの首の波。舵の並列。放り出された揚げ荷の山。鎖で縛られた棧橋の黒い足。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇っていった。海関の尖塔が夜霧の中で煙り出した。

(横光利一「上海」)

「七階の運動」「東京アレグロ」では、まなざし自体が列車やエレベーターに乗って速度を持っていたのに対し、この冒頭のまなざしは、港からの定点観測のようだ。もはやまなざしは列車やエレベーターに乗るようには、速度や上昇を享受していない。まなざしは速度や上昇から離れて、それらを静かに追っている。

上海行以降、「上海」「寝園」「機械」といった横光の小説では、速度と力は登場人物たちの外側に位置するようになる。複数の一人称が交差しながら、恋愛、殴打、発砲、さまざまな人間関係に対する責任が、女や男や機械の姿を借りて、一個人に覆い被さっていく。横光利一のことばによつて、人間の関係を個人に引き受けさせるような速度や物量の力、それをもたらす時代の力が明らかになるうとしていた。

【虚子とエレベーター】

震災の前後を通して、花袋や横光とはまったく違う態度で、エレベーターに接していた文学者がいる。高濱虚子だ。

ホトトギス発行所は丸の内ビルディングの623号室にあった。貸しビルである丸ビルにとって、何台ものエレベーターは伊達ではなく、生活の必需品だった。

虚子が新聞を読んでいて丸の内ビルディングの広告を見たのは震災前の大正11年のことだった。俳句の発行所とビルディング。およそ似つかわしくない取り合わせにも関わらず、虚子は広告を読んで4、5日してから入室を申し込んだ。この決定には、さしたる根拠があったわけではないらしい。

それはどんな室であるか、暖房の工合はどんなであるか、電燈の工合はどんなであるか、光線や通風の工合はどんなであるか。静かなか

(*ママ)、騒々しいか、そんな事はさっぱり判らなかつた。又其處にホトトギス発行所を移したならば一體どうなるのか、それもさっぱり判らなかつた。

(高濱虚子「丸の内ビルディング」)

そのくせ虚子はいったん下した決定に自信を持っていた。社員は、ハイカラなビルディングとの不調和を憂えたいが、虚子はそんな社員の反応に「何の痛痒をも感じなかつた」。

入室すると、エレベーターは虚子の生活の中で欠かせないものになった。しばらくの間は、持ち主である三菱地所に顔を出して交渉をした。虚子の部屋は七階、地所部は五階だった。そのわずか二階の移動に虚子はエレベーターを使った。エレベーターによる移動は速度に満ちたものではなく、むしろ煩雑な手続きを伴った。しかし彼はそうした手続きを繰り返した。

その地所部に顔を出す度に、エレベーターの處にまで歩いて、エレベーターで五階まで下りて、それから地所部のところまで歩いて行くのに、かなりな時間と足數とを要した。

(同上)

【丸ビルの朝】

丸ビルは震災に耐えた。周辺には露天商が立ち、ビル内の店舗と露天を回れば生活用品が揃った。震災をきっかけに、それまで銀座や日本橋に向かっていた客が丸ビル周辺に集うようになった「銀ブラ」に対して「丸ブラ」ということばが生まれた。

丸ビルは良くも悪くも風評的的だった。最先端の会社員の集う場所。美人タイピストの集う場所。無機質な窓の並ぶ無愛想なビル……

しかし、そこに通う人にとって、丸ビルはなによりもまず、生活の場だった。

虚子も花袋と同じく、「大東京繁昌記」の連載陣の一人だった。花袋が下町を巡り、最後に百貨店にたどりついたのに対し、彼はあくまで、自分の通う丸ビルを中心に、丸の内の昨今を写生した。季語とは無縁に見える丸ビルにも季節はあった。

朝早く東京驛に着いて、寒い北風を片頬に受けながら丸ビルに駆け込むと二三臺のエレベーターはもう動いている、八時十五分過ぎ位である。

七階で降りて、懐中から鍵を出してホトトギス発行所のドアを開けて内にはひると、スチームはまだ通ってゐないが、鐵骨に昨日のぬくみが残っていて何所となく暖かい。

(高濱虚子「丸の内」)

ビルディングの活動を写すこの文を読んでいると暖かいスチームが徐々に行き渡っていく丸ビルが、ひとつの血の通う生き物となっていくように感じられてくる。しかし、虚子が写生しているのは、横光らが同じ時期に行なっていたような、都市という生き物の中で人がその体液のごとく忙しく動く情景ではない。ビルディングが人を動かすのではなく、人が動く。時が過ぎる。その結果として、ビルディングが生き物じみてくる。

虚子はビルディングの一室に腰掛け、壁越しに聞き、窓ごしに見、過ぎる時を書く。ビルは虚子にとって気ぜわしく来て去る場所ではなく、そこにいて、目や耳を澄まし、時を感じる場所だった。

最前から電話の鳴り續けている部屋がある。その事務員はまだ誰も来ない物と見える。

隣室にはタイプライターを打つ音が響きはじめる。

中庭を隔て、向ふ側のある部屋の窓には人顔がうつる。そこには晝間でも明るく電燈をともしてゐる歯医者である。椅子にもたれて歯の治療を受けてゐるものがある。醫療器械を掃除している女の助手がある。

(同上)

【灯ともし頃】

中庭をはさんでホトトギス発行所の向かいには「バトラー歯科」があった。その歯科に勤めていた杉枝富貴子という女性の文章が残っている。

人々の憧憬の的となっている、或は謎の迷宮
になっている丸ビルに居りながら、私は全く周囲
の雰囲気に対し少しの親しみもなく、何ら支配さ
れることもなく、只働きの場所といふ以外に、
つとめて別の感を持たないのである。

（「丸ビル婦人だより」婦人公論・大正14年）

この文章を書かれる少し前、大正13年12月に
「ハート団」という不良少女団が新聞を賑わした。
通称ジャンヌダークと呼ばれる丸ビルのタイ
ピストが「丸ビル内の女事務員を誘惑してハート
団を組織し、自ら団長となり丸ビル内の喫茶
店の女将と連絡をとって丸ビルに出入りする青
年を弄び、金品その外を奪ひとって居た」（報
知新聞・大正13年12月10日）と報じられた。事
件後、丸ビルに勤める婦人タイピスト連は、冤
罪をすすぐため丸ビル廊清懇談会などを催した。

こうした丸ビルをめぐる事件は、おそらくそ
こに勤める女性の心をかたくなにしたに違いな
い。周囲とのかかわりを持ってあらぬ風評が立
つ。「恋の丸ビルあの窓あたり／泣いて文書く
人もいる」と西条八十が「東京行進曲」に歌っ
た丸ビルだが、女性が澁刺とこの文化の殿堂を
享樂することは、そうたやすくはなかった。彼
女に限らず、「丸ビル婦人だより」に寄稿した
丸ビル勤めの女性の多くは、職場以外の場所と
いかに自分が関わりがないかを強調している。

長い廊下やエレベーターホールに、人の声が

響く。そうした声が、かえって人とのかかわり
を遠ざけざるをえない彼女の心に淋しさを感じ
させたとしても、無理はない。

私は仕事を終へて帰らうとする時に、七階の
窓際に立つて都の空を眺めて見る。晴れ渡った
夕空には、人の世の汚れも知らぬ顔に渡り鳥も
飛んで行く、清い星も輝いている。私の心には
華やかな建物にそぐはぬ淋しい思ひが湧いて来
る。

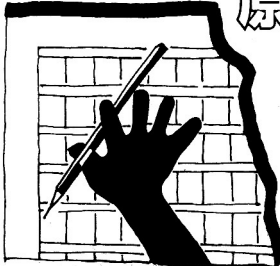
エレベータを 待ちつつあれば掃除夫の
小唄もきこゆ 灯ともしの頃
（同上）

丸ビルは昨年解体され、その跡はいま工場の
の囲いで覆われている。

（完）

参考文献

- 「東京震災記」田山花袋、現代教養文庫。
- 「大東京繁昌記 下町編」東京日日新聞編、春秋社、昭和4年。
- 「東京アレグロ」文芸春秋、昭和2年12月号。
- 「丸の内百年の歩み」三菱地所、平成5年。
- 「新俳文」高濱虚子、小沢書店、昭和8年。
- 「底本高濱虚子全集第八巻」毎日新聞社、昭和49年。
- 「上海」横光利一、講談社文芸文庫。
- 「丸ビル婦人だより」婦人公論、大正14年4月号。



原稿募集について

送付先：日本エレベータ協会 事務局
〒107-0062 東京都港区南青山5-11-2

編集委員会では、より多くの方々から原稿をいただき、全国の読者に、本誌をより身近で親しみのあるものにしていきたいと思っています。

右記の内容について執筆いただける方の紹介をお願いします。

掲載順に原稿料をお支払いいたします。ご寄稿、ご連絡をお待ちします。

◎昇降機に関連した紀行文、変った体験記で国内外を問いません。原稿用紙8～30枚程度（写真、絵など含む）です。

◎施主、設計事務所、建設会社など外部の方で昇降機に接する機会も多く、昇降機について日頃より思っていることや、建設的な意見など執筆いただける方おられましたら、ご紹介下さい。

〔編集委員長〕